

佐渡人氣質はどこからきたか

(平成十一年五月二十九日講演)

一つの民族にはその民族特有の気質があります。日本という国の中でも地域によって、そこに住む人の気質にはかなりの違いが見られます。同じ新潟県でも越後には「越後人気質」があり、佐渡には「佐渡人気質」があります。

そこで今日は、一般に「独立した風風が強い」とか「平等意識がある」といわれる「佐渡人気質」あるいは「佐渡人かたぎ」というものが培われてきた源について、お話ししてみたいと思います。

はじめに申し上げておきますと、（これは佐渡に限ったことではありませんが）その地域の気質は、その土地の永い歴史と風土の中から形づくられてくるもので、おおよそ次の三つの影響を受けると考えられます。

第一は、人はどのようにしてその村を作ったか。第二は、よその地域の文化をどのように受け入れたか。第三は、生産のありようはどのようなようであったか、であります。

それぞれ異なった風土と歴史の中から生まれる気質ですから、善し悪しで論じることが出来ません。ものごとに対する構えようが異なるということなのです。

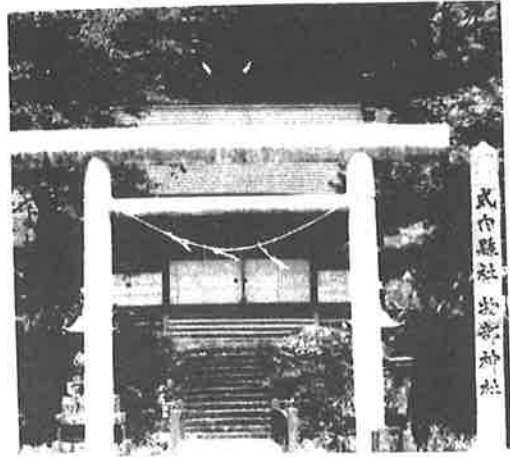
さて、佐渡人気質ですが、限られた時間でお話することは大変むづかしいので、ある部分をとって述べてみますから、そのような観点から皆さんの周辺を眺めていただきたいと思います。

まず、佐渡はどのような形で始まったか、について少し申し上げておきます。

私どもは佐渡を語る場合に、佐渡は昔から国仲平野が開けていて、耕地をきちんと縦横に区画した条里制というものがあって、田んぼを作り、人が住んでいたかのように思いがちですが、じつはそうではなかったのです。国仲平野は紛れもなく平野ではあったけれども、やぶばかりで人の住めるところではありませんでした。国仲平野が開発の対象となったのは一三〇〇年代になってからのことです。

では古代のころ佐渡の中心地はどこにあったかを見ましましょう。

佐渡には奈良朝廷が祀った神社がいくつもありました。「ハナムラ神社」（西三川の小泊<sup>こどまり</sup>）、「サシバ



神社」(相川の高瀬)、「オオバ神社」(所在は不明)。もう一

つ資料に出てくるのが「モノノベ神社」(畑野の小倉)。いま私も「小倉は山の中」といいますけれども、当時は佐渡で最大の村だったのです。といっても田んぼなどはありません。一面アワ、ヒエ、キビ、マメなどの畑地であり、栗林も多かったのだらうと思います。残されている記録から、当時の人々の主食が米ではなかったことが伺えます。

この小倉の村に、流人第一号、穂積朝臣老ほむねあそみおらという人が配流されてまいります。西暦七二二年のことです。

この人の詠んだ歌二首が万葉集に載っております。

わが命真幸まことまきくあらばまたも見む 志賀の大津おほつに寄する白波

(私の命が無事で赦されて都に帰ることができるならば、この志賀の大津に寄せる白波をふたたび見たいものだ)

〔巻 三〕

天地の嘆き請こひ禱のみ幸まきくあらば また帰り見む志賀の唐崎

(天地の神よ、嘆き願いつゝ祈って、私の命が無事であったなら、都へ帰ってまた志賀の唐崎を見たいものだ)

〔巻 十三〕

穂積朝臣老は都への想いをつのらせながら在島十八年。七四〇年に赦されて都に戻ります。『佐渡志』という書物には、この人が小倉の地で祖先を祀ったのが「モノノベ神社」ではなからうか、と記されています。

ひとがどこに住むかは、その時代の人々の生産関係と深く関わりがあります。たとえば二見半島から鷲崎までを「海府」（海部とも書く）と呼んでいますね。奈良朝廷が塩を焼くために派遣した技術者たちの「部」なんです。当時は技術者の集団を佐渡へ送りこんで塩を作らせていたのです。雄略天皇（五世紀後半）の時代海府で作った塩を敦賀、小浜を通して都へ運ばせました。

塩を焼くために人々が移り住み、村をつくった。そこにその人たちの祭りをする神社ができた、それがサシバです。また小泊には須恵器の窯跡がたくさんあります。ハナムラは、窯か西三川の砂金山のどちらかとの関係があったと思われれます。

佐渡はよそから人が移住してきた時期が非常にはっきりしています。一つは、いま申し上げた塩を焼く技術者が他国から入って来た六世紀の時代。一つは、鎌倉武士たちが地頭になって入島してきた十三世紀の時代。一つは、佐渡に鉢山が出来て人が集まった江戸時代初期。

他国から人が移ってくるということは、他国の文明が入ってくることでありますから、新しい社会を創り出す要因の一つにはなります。私どもはそれを取り入れて自分たちの獨創性を創り上げていくのです。このことは一見、反対のことのように思うかもしれませんが、よそから文明が入らなければ、自分たちの独自の性格、つまり特徴を思いつかないのであります。

私どもは、いろいろな面からもの事を考えているような錯覚をしていますけれども、じつはかなり一方的にしか考えていないことの方が多いものです。たとえば、佐渡の飛行場問題を挙げてみますと、佐渡にいる人の大多数の意見は次のようです。

「一時間ジェットフォイルに乗れば、新潟へ行けるがさ。それより落ちたら困るっちゃ。音がうるそうて……」

だから「飛行場なんかなんする」と反対します。しかし、在京の皆さんから見れば批判はありましょ。

「対馬にも、五島列島にも飛行機が飛んでいる時代に、それよりも大きな佐渡島へなぜ飛ばないのか」とこれはどちらが正しいか、ということではありません。日常、飛行機に乗りつけている人は、飛行場が必

要だと思ふだろうし、乗ったことのない人はなくても困らんですから。同じことがジェットフォイルを導入するときにもあったそうです。

とかく私どもは相手のほうが間違っていると決めてしまいがちですが、それよりも、この人はなぜそういう風に考えるようになったのか、と考えるほうがいいだろうと思います。そういう点で佐渡人は相手の意見をも認める寛大さに少し欠けるような気がします。日頃ざっくばらんに話し合ったり、意見交換するサロンのような場が佐渡に少ないのを残念に思います。

さて、今日の佐渡人の気質や佐渡弁のベースとなったのは関東武士の影響かと思ひます。

では、その武士たちは関東のどこの地域からやって来たのでしょうか。

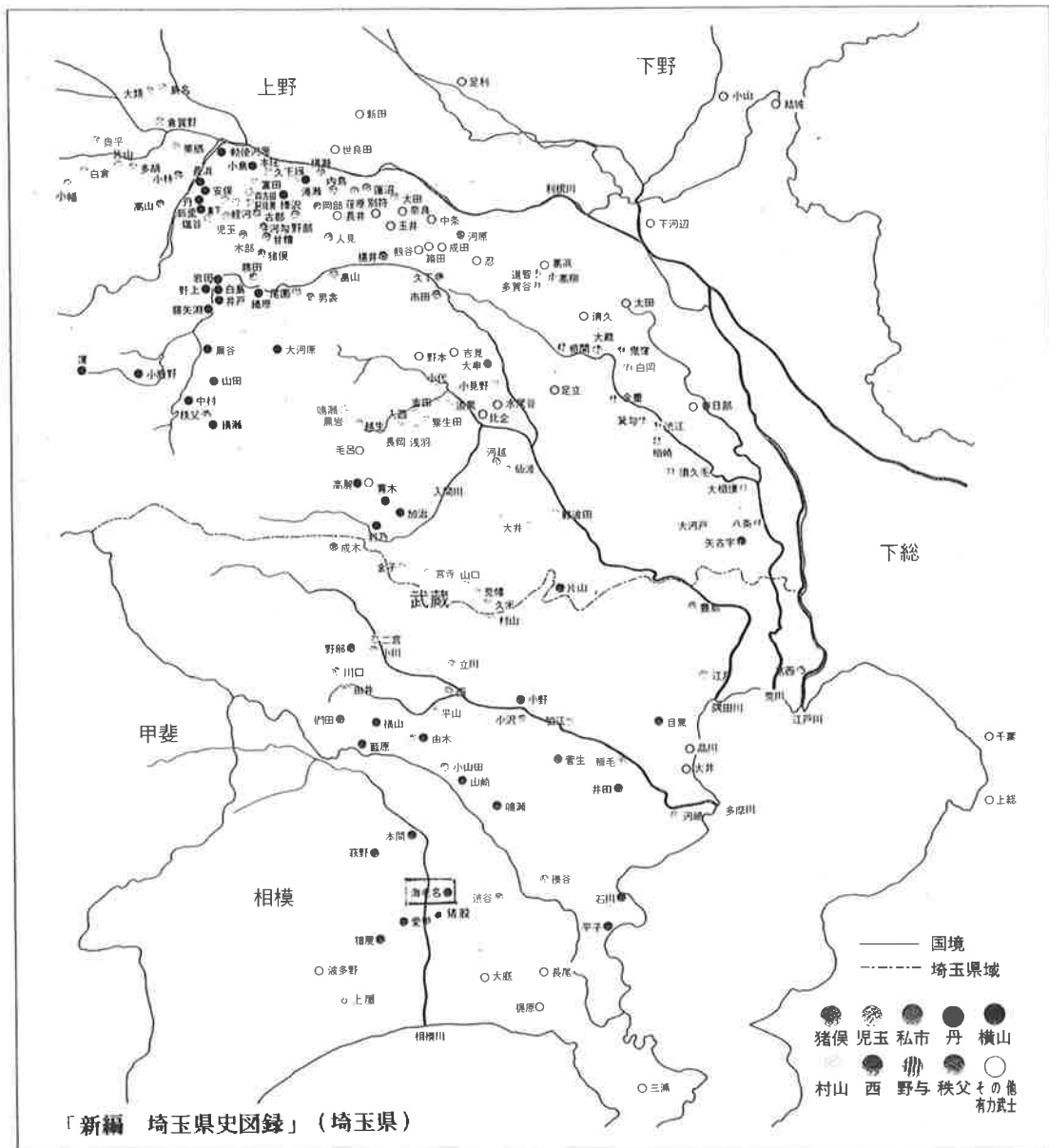
神奈川県中央部に当る座間、厚木、綾瀬、平塚、相模原、伊勢原などにある地名を並べますと、佐渡の名字になります。

お手元の地図（次頁）をご覧ください。「海老名」という所がありますね。そこから源頼朝の家臣海老名氏が成立して武蔵七党の一つとなります。海老名市内の地名に「猪股」という所がありますが、ここから佐渡に来た人たちが「猪股姓」を名乗りました。北西に「本間」という部落があります。海老名氏の家臣がいた所で、承久の変（一二二一年）後、この本間から地頭職を得て入島した人たちが「本間氏」を名乗ります。海老名の東にある「渋谷」から来た人たちが、「渋谷氏」。平塚市の「土屋」から来た人たちが「土屋氏」を名乗りました。相模原市の「相原」（粟飯原とも書く）から来た人たちは藍原を名乗って吉井の地頭になりました。その他伊勢原市の「糟谷」からは「糟谷氏」、小野郷からは「小野氏」がやってまいりました。

（一）平安後期、武蔵国内に成立した中小武士団の総称で、「七党」は室町時代の美称。鎌倉時代は「武蔵の党々」などとよばれ七つに固定していない。猪股、横山、兎玉などの武士団があり、これらの郷地頭クラスの武士が一一数郡規模でゆるやかに結合して勧農などの地域開発や祭祀、軍事行動を共にした。

「武蔵七党」の内訳は本稿末尾掲載。

# 武蔵武士分布図



- 横山党：多摩郡横山（八王子市）を中心に南多摩地域に多い。
- 猪股党：横山党の支党とされ、主に埼玉県児玉、大里、比企郡に分布。
- 野与党：主に埼玉郡に分布。
- 村山党：多摩郡村山（東村山市）を中心に埼玉県では入間郡。
- 西党：主として南武蔵地域に分布。
- 丹党：武蔵守多治比（丹治）氏の後裔と伝え、秩父、児玉等に広く分布。
- 児玉党：武蔵権守有道氏の後裔と伝え児玉、秩父、比企等に分布。

ではなぜ、海老名氏がそれほどまでに大きくなったのか。それは「馬」の牧場を経営していたからです。馬をもつ者が天下を制する。源氏が平氏を倒したときには、ほとんどの話の中に馬が出てきましたよ、頼朝の場合でも石橋山の戦で大敗を喫してのち、舟で千葉へ渡り牧場で騎馬の腕を磨いておりますね。もっとも彼は落馬が原因で命を落したのは皮肉ではありませんけれど。

海老名はもともと牧場地だったのです。小野郷もまた大きな牧場地でした。のちのことですが、戦国時代に上杉氏が羽茂本郷の羽茂本間氏に「佐渡の名馬を送れ！」と命じたところ、「らちかんような馬」が送られてきた。それが原因になって上杉謙信が佐渡へ攻め込んだという伝説があります。

ともあれ佐渡はまぎれもない馬産地。江戸時代の初めには七千頭もいたそうです。馬数が増えますと、困ったことに馬が田畑に出て作物を食べ荒します。村人たちは羽茂の本間氏に、馬が村の耕地に出ないよう馬留めの土居（土手や堀のこと）を作って欲しいと願い出て、土居が作られたのです。その土居の一部は今なお小木半島に残っております。牧場だった地名を留めるものに、真木（河崎）、大木戸（羽茂）、内巻（新穂）などがあります。このように多かった馬ですが、江戸時代も半ば頃になりますと、牛の頭数のほうがはるかに上まわりました。戦争がなくなると馬が要らなくなったのです。

ついでに申し上げておきますが、皆さん「流鏑馬」をご存知でしょ。鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮の行事は有名ですが、かつては佐渡のどこの八幡様でも見られたものです。今はわずかになってしまいましたけれど。この行事が佐渡以外であまり行われていないのは、流鏑馬は本間氏のお家芸、つまり本間氏の特権だったからです。本間氏の祖は源氏ですから、本間氏は自分の支配する地に氏神様を祭る八幡宮を造って、流鏑馬を行なったわけでありませう。

馬の話はこれくらいにしまして、海老名氏についてももう少し触れておきますと、この人は一一〇〇年代に一度偉くなります。源頼朝が地頭職を置いて一國支配を行ったときに、海老名氏は播磨（現兵庫県）の国の矢野庄の地頭に抜擢されます。海老名氏は他に尾張國（現愛知県）の知多半島の地頭もやっております。

す。応仁の乱のころ尾張国羽栗郡はぐりから延暦寺との戦に負けて佐渡の赤泊へ逃げてきた真宗門徒の人たちがいます。そのときの中心人物で道場主の善性上人が赤泊の蓮場むすねに本立寺ほんりゅうじ（本龍寺とも書く）というお寺を開いております。浄土真宗の門徒で、本尊は阿弥陀如来。本来なら木像を与えるところお金がなかったでしょう、絵に描いた本尊です。方便ほうべん法身尊像ほうしんそんざうといひます。その裏書をみますと「尾張国羽栗郡河野道場本尊也 願主釈善性」となっています。これを描いたのは、「蓮如」（一四一五—九九）という本願寺八代の僧です。

さて話を戻しまして、尾張から佐渡へやってきた人たちは赤泊、岩首、松ヶ崎辺りに住みつきました。もちろん尾張弁で喋ったのです。この地域はいまなおその名残りを留めています。たとえば「大根のような足」という場合、「あゝ、りゃあこんか」といひましょ。赤泊辺りへ入って来た人たちと、関東から国仲辺りへ入って来た人たちとは背負っている文化が少し違うのかもしれない。

私はときどき皆さんに佐渡弁を喋るのですが、新発田弁や長岡弁に比べたら、はるかに聞きやすい言葉ではないか、と私自身は思っているのですが。その佐渡弁の原型となっているのが、さきほども申しましたが関東武士の言葉です。なぜ、そうなるのかといひますと、当時の佐渡の文明度が相模辺りに比べてかなり低かったということです。言葉の伝播は、文化の高い方から低い方へ流れていくからです。

佐渡人がそれまでどんな言葉で喋っていたかは知りませんが、関東言葉に憧れ、積極的に受け継ぐうとしていたからだ、と考えるほうがよいかと思ひます。

皆さんは、つぎのように諭されたことがありますよ。

「高校を出て島外に行ったら佐渡弁は使わな、笑われるぞ」と。

あれは自己の文化を否定するようなものです。人から笑われて辛い思いをしなくてすむようにという親心からだったのです。上京しますと、早く東京弁に慣れようと思ひますから、半年ほどで流暢にしゃべる



ようになりますね。しかし私は佐渡弁でしゃべって一向にかまわないと考えています。

佐渡の人たちは、関東から入島してきた村殿や領主の名字に憧れを抱き、次第にその名字を名乗るようになっていきます。たとえば、「本間姓」の場合、できるだけ親方「本間」に近づいて「本間姓」を与えられれば幸いである、という雰囲気がありました。ですから本間氏が家来に「お前に本間姓を与えるぞ」といいますと、みんな喜んで本間を名乗りました。

余談になりますが、皆さんは江戸時代には一般人に名字が無かったと考えておられるかもしれませんが、それは教科書の書き方が悪いのであって、誰でも名字は持っていました。ただ公式に「名乗ってはならない」というお触れが出ていて、公の場で使用することが禁じられていただけのことです。

こうして私どもは地頭と同じ姓か、あるいは親方衆から与えられた姓を、現在に至るまで大切にたえてきているのです。また出身地を姓としているものもたくさんいます。

はじめに「国仲平野が開発されたのは一三〇〇年代になってから……」と申しましたが、それは本間氏のつくった城館が多く山ぎわにあることがわかります。やがてその一帯から国仲平野が開発の対象となっていたのです。大きなお寺は、大体谷の奥のほうに造ってありますね。眞光寺、長安寺、長谷寺、正光寺など、国仲平野の真ん中にお寺はありません。

上新穂刈りから国仲の低地の水を集めて海に流れこむのが国府川こふのかわですが、この川の流域は、もっと後にはならないと開発されません。江戸時代の絵図面をみますと、国府川のへりの所は高低があって、低い所は田んぼに耕せますが、高い所は耕せないんです。明治以降は何回か耕地整理をして土をならしたので、今は平らになっておりますけれども。

古代から中世にかけて、国府川の両岸には船着場がありました。波多郷はたごう（現畑野町下畑）に府中があった、中世にはそこに守護所しゆごしょが置かれていて、他国から来た舟がこの川に入ったためです。たとえば、中流

の金井町大和地内に「船津ふねつ」という所があります。ここは藍原氏の川港でした。この近くに「住吉神社」(海運の神を祀り、佐渡では珍しい)があります。なぜ平野の真ん中に航海神があるのか、と不思議に思われるでしょうが、かつては船着場があったからです。ほかに「舟代ふねしろ」などの地名がその名残りを留めています。

さて国仲平野の開発が進んでまいりますと、困ったことに大洪水がたびたび起きるようになります。

新穂に「皆川みながわ」という部落があります。その皆川から金井にかけて今は何もありませんが、江戸時代の初めまでは家がぎっしりありました。新保村やむちが廻り村があったのです。文祿二年(一五九二)にその地が大洪水に見舞われて、村の人々が他所へ移住しました。その皆川のすぐ奥に「鞭ヶ廻りむちまわ」という地字がありますが、この村の人たちもまた水害のために上にあがり、新しく作ったのが「上新穂」です。

このことから面白いことがわかります。水害に見舞われた人々が高いほうの土地に移って行くわけですが、田んぼを背負うて上がることはできません。ですから村人は洪水が収まり春になれば、田んぼを作るために元のところを下りてくることになります。つまりその家の田んぼがどこにあるか、を知ることによって昔どこに住んでいたかがわかるのです。皆川の村が、金井町の新保山に共有林を持っているのは大佐渡と小佐渡の境にいたためです。

あといくつかそのような場所を挙げてみたいと思います。私は金井出身ですから、金井のことに詳しいのですが、金北山の下したの「西方せいほう」という所に私の家があります。西方の部落のほとんどの田んぼは佐渡病院の沖のほうにあります。西方にある名字をみますと、谷一つ越えた大和田に多いのです。みんな金井の沖から洪水で上がったのです。その上がり場所がそれぞれがったものですから名字があちこちにあるのです。八幡の沖に「長木ながき」という所があります。本来、長木は「長池」です。これも洪水に見舞われて、長木や泉に上がりました。隅田姓が両方にあるのはそのためです。名字をみましても、新保沖にいた「見玉」の場合、吉井へ行った「見玉」もおれば、新保しんほの関根へ逃げた「見玉」もおります。逃げるときは慌てていますから、一カ所じゃなく、あっちこっちへ行くことになります。それに親類縁者がいて「困った

ら面倒みてやるがさ」と言われておりますから、頼ってその方向に行くことになります。村からお寺だけが移っていく場合もありました。小木に照覚寺しょうかくじというお寺がありますが、この寺の檀家は羽茂のお城の付近にいます。お寺だけが小木へ行ってしまったんで檀家が今も小木の寺へ行くんです。真野竹田の大運寺さんなんかもとは貝塚かいづか（金井町）にありましたから、今も貝塚には大運寺檀家がいっぺことあります。江戸時代には佐渡銀山へ流れこんだ人がたくさんおります。新穂にいる雑賀は、和歌山の雑賀から豊臣秀吉に追われて佐渡の野浦に来て、そこから皆川に入って一族で村をかまえます。和歌山では「さいか」と呼ぶんですが、佐渡ではなまって「さいが」となります。この一族は団結が強くて雑賀同族会を作って交流をもっているように聞いています。

和歌山からといえば佐渡の「岩崎」さんは岩崎村からきて漁業の技術をかわれて「稲鯨いなぐま」の村をつくりました。今、白浜温泉のあるところは昔、「ムロウグン・イワサキムラ」と呼んでいました。そういえば西浜の漁師といえば国仲の人は稲鯨の漁師のことを思い出しました。江戸時代のはじめころ、大久保長安に招かれて、よそから佐渡に来た漁師がわかっています。ひとつは相川にいる刀根氏とねです。海に潜ってアワビなどをとる海士です。相川の「海士町」に住んで享保年間からは「長崎俵物」にアワビやナマコを加工したものを長崎に送ったことで知られています。彼等がこしらえたものを長崎に運んだ船頭や水主たちが、長崎弁をならってきて小木半島にバツテン言葉をつし、うえられたという説があります。もうひとつ、大久保長安時代に石見から招かれた漁師さんがいます。相川の姫津ひめづに行きますと、石見いづみという名字がたくさんあります。姫津は一村全体が石見から来たといえます。島根県瀬摩郡仁摩町にまの馬路まじにはこゝから佐渡へ行ったという云い伝えがあります。石見から佐渡へ行った人たちはサバ釣りの漁法とスケトのハエナワの漁法を伝えたといえます。ついこんじゅなまで佐渡では、姫津カタセといえ最高のカタセだといわれていたことを知る人も多いでしょう。

江戸時代のはじめ頃までは、佐渡では北海道と同じように鱧は寒中にとって臍物を口から抜いて丸ごと干して干鱧かまぼこにつくる文化を持っていました。そこへ石見の人が来てハラを開いて干すことを教えてくれた

んです。それで片一方が背中だというので「片背」と呼んだのだそうです。

石見から来た人は、ほかにも沢山います。両津市にいる「静間」さんは石見の仁摩郡の「静間」村の人で、奉行所で役人をしていました。河原田や海府にいる「三嶋」さんは島根県出雲の田儀たぎの人、出雲の大山の奥の鷲銅山で稼いでいて博多の商人神谷寿禎と石見大森銀山を発見しました。慶長の頃には毛利氏のもとにいて石見銀山を経営していましたが、家康につかえて伊豆の「湯ヶ島」で銀山をつくり、慶長のはじめには佐渡銀山を見立てに佐渡に来ました。佐渡の「三嶋」が「三島」と書かないで「三嶋」と書くのは、その伝来を主張しているからです。佐渡はこのように、あちこちからやって来た人たちができていて、というところが歴史的に一つの特徴です。村毎に個性があり独立の気風が強いのは、このようなところに原因があるのでは、と思っています。

(了)

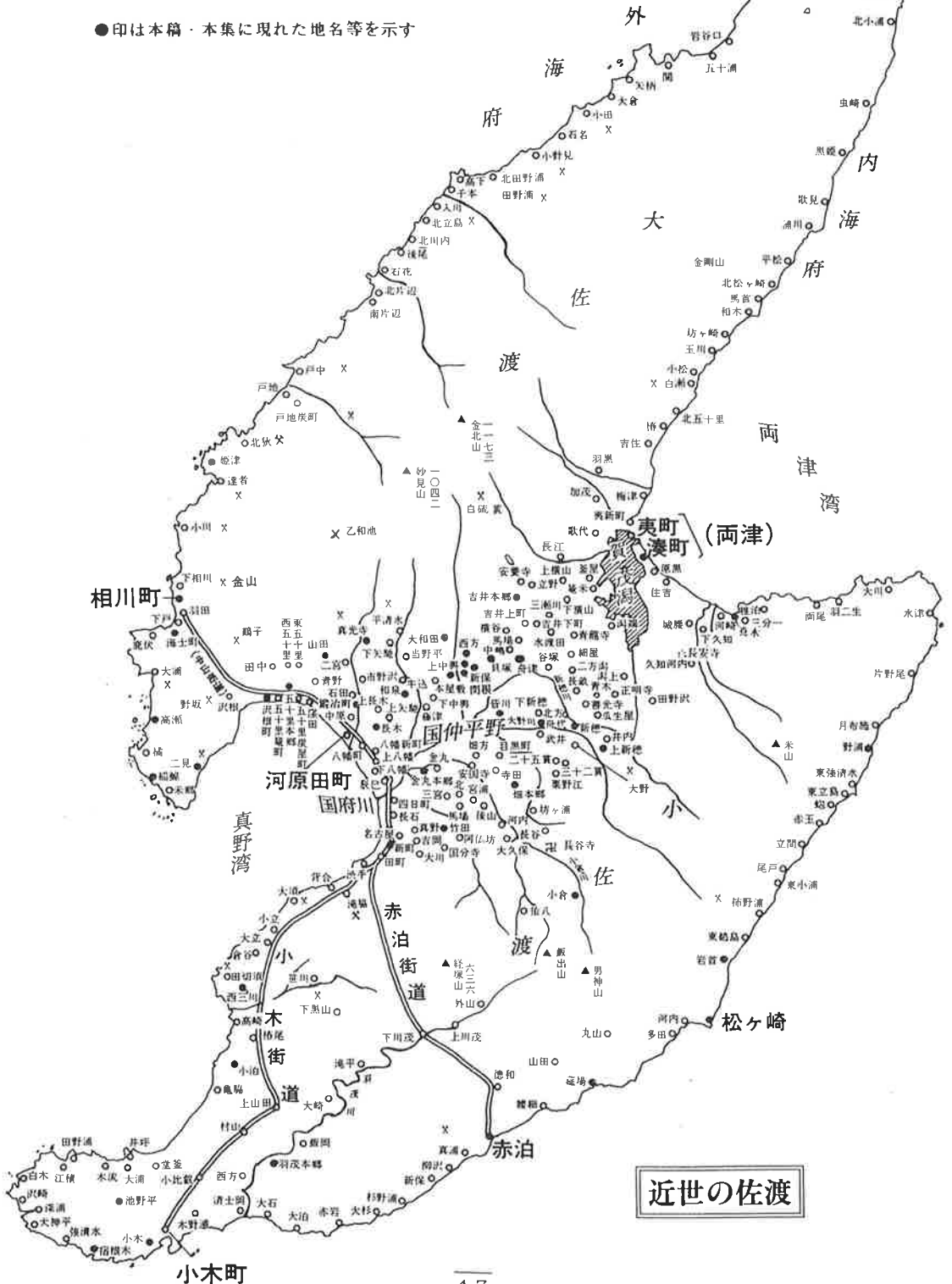
■ 武蔵七党姓氏一覧 ■

横山党	猪俣党	野与党	村山党	西党	丹党	児玉党
横山・梶田・海老名・藍原・平子・野部・山崎・鳴瀬・古郡・小倉・由木・室伏・大串・千与字・伊平・櫻井・古市・田屋・八国府・山口・愛甲・小子・平山・石川・古沢・小野・古庄・中村・大貫・田名・小沢・小俣	猪俣・荏原・河勾・太田・人見・甘糟・藤田・山崎・岡部・内島・蓮沼・男衾・横瀬・野部・木里・尾園・無助寺・友庄・木部	野与・多名・鬼窪(北・南)・白岡・渋江・萱間・道智・多賀谷・大蔵・西脇・箕勾・大相模・利生・柏崎・須久毛・八条・金重・野崎・高柳	村山・大井・宮寺・金子・山口・須黒・横山・仙波・広屋・荒波多・難波田	西・長沼・上田・小川・稻毛・平山・川口・由木・西宮・由井・中野・田村・立河・粕江・信乃・高橋・清恒・平目・田口・二宮	桑名・中村・古郡・大河原・塩屋・岡田・長田・坂田・大窪・栗毛・弥郡・薄・織原・横瀬・秩父・勅旨河原・新里・安保・瀧瀬・長浜・青木・糠沢・小島・志水・相原・高麗・加治・桐原・肥塚・判乃・白鳥・岩田・蕪山・山田・竹淵・小原野・黒谷・堀口・南荒居・由長・藤矢淵・野上・井戸・葉栗	庄・本庄(西・東)・具下塚・若水・四方田・宮田・蛭河・今居・阿佐美・小中山・塩屋・児玉・富田・藤田・長袖・新生・中条・新里・鳴瀬・里岩・岡崎・入西・浅羽・堀箱・長岡・大河原・小見野・栗生田・小代・越生・高坂・平児玉・秩父・与嶋・岩田・竹沢・多子・小幡・倉賀野・大類・稻嶋・柏島・片山・新屋・大淵・島方・真下・御名・大浜・奥平・白倉・吉嶋・山名・鳥名・小河原・木西

「武蔵武士」(福島正義著、さきたま出版会)

- 横山党：多摩郡横山(八王子市)を中心に南多摩地域に多い。
- 猪俣党：横山党の支党とされ、主に埼玉県児玉、大里、比企郡に分布。
- 野与党：主に埼玉郡に分布。
- 村山党：多摩郡村山(東村山市)を中心に埼玉県では入間郡。
- 西党：主として南武蔵地域に分布。
- 丹党：武蔵守多治比(丹治)氏の後裔と伝え、秩父、児玉等に広く分布。
- 児玉党：武蔵権守有道氏の後裔と伝え児玉、秩父、比企等に分布。

●印は本稿・本集に現れた地名等を示す



近世の佐渡

# 島根県

